

NPO 純正律音楽研究会会報 ～2017年3月発行～

ひびきジャーナル



〒168-0072 東京都杉並区高井戸東 3-2-5-102 Tel:03-5317-0291
Fax:03-5317-0289 e-mail:puremusic0804@yahoo.co.jp

発行日 平成29年3月24日
発行責任者 NPO 法人 純正律音楽研究会
編集 相坂政夫

No.51



木々の芽吹きに春を感じる今日この頃、会員の皆様如何お過ごしでしょうか。昨年は3月の「玉木宏樹メモリアルコンサート」を皮切りに、9月「合唱と純正律音楽コンサート」、11月大阪での「癒しの純正律音楽コンサート」、最後は12月の「クリスマスコンサート」と開催しました。

また、二度のレコーディングで、CD「歌謡(うた)のこころ 愛の旅路」をリリースできました。皆様方のご支援の賜物と心から感謝申し上げます。

今年最初のコンサートは、3月11日土曜日、角筈区民ホールにて「玉木宏樹メモリアルコンサート」を開催いたしました。多くの方々から感動のお言葉を頂戴し、誠にありがとうございました。

今回は、9月16日土曜日「癒しの純正律音楽コンサート」を、昨年12月1日に竣工いたしました、山崎製パン、クリエイションセンター内の飯島藤十郎社主記念 LLC ホール(千葉県市川市)にて開催いたします。多くの方々のご来場をお待ちしております。

今年も純正律音楽研究会をよろしく願い申し上げます。

3月は東京、大阪、台湾とコンサート

洗足音楽大学教授・ヴァイオリニスト
NPO 法人 純正律音楽研究会 代表
水野佐知香

桜の便りもちらほら！

玉木さんが天国へ行かれて丸5年が経ちました。あっという間でした。

この3月11日にはメモリアルコンサートを大震災の追悼と合わせて、三宅美子さん、吉原佐知子さんとともに角筈ホールで行いました。

前半はいつも玉木さんがしていたようにバッハの無伴奏ソナタ1番からアダージオを弾き、ロマンあふれる美しい玉木作品を中心に、後半は「恋に落ちて」「有楽町で逢いましょう」「ブルーライトヨコハマ」など、玉木さんの素晴らしい編曲を弾かせていただきました。

皆さまご存知のように、既成の曲も玉木さんの手にかかると名曲になってしまう。お客様もとても良いとお喜びになり、演奏を聴かれて目に涙を浮かべていた方もちらほら！本当に素晴らしい作、編曲になっています。今でも生きていていっぱい曲を書いて欲しかった！

さて、今年は、ベートーヴェンのソナタ全曲を、東京銀座のヤマハと大阪三木楽器で4回に分けてコンサートを藝大の同級生のピアニストの児嶋一江さんと企画。あ～大変！と今頃気がついていきます（笑）すでに1回目の大阪は終わっています。いろいろなところを反省しながら勉強しています。

また此の二月の末から三月の頭にかけて台南に行っていました。

朝9時過ぎに羽田を発ち台北まで約3時間半、そのあと新幹線に1時間半乗り4時頃台南駅に到着しました。この新幹線は日本の新幹線で全くレイアウトも一緒、ただトイレが車輪に対して直角になっており狭くてビックリしましたが(^_^)今回は、台南で4日間のマスタークラスとコンサートでした。

冬でとても寒いと言われながら16度、外を見ると半袖に短パンの男の人とダウンコートを着た女性が歩いているのにびっくり!!

この3月の時期は梅雨なのだそうですが、全く雨が降らず水がめも大変なことになっているそうです。外をよく見ると田植えがしてあります。お米はこの地区では年に2回は当たり前、もう少し南に行くと3回だそうです。市場に行ったり屋台で食べたり、皆さん温かい人柄でとても気持ちよく過ごしました。

さて、ここ台南の郊外に一見普通の建物ですが、600席あるコンサートホールがあります。その名もドリームホール！ドリームランドと命名された土地です。ここには、音楽、ダンスの専門教育システムの整ったお教室、幼稚園があり一歩ここ踏み入ると本当に夢の世界が広がっています。お花畑の中、素敵な絵などに囲まれ、いろいろな発想がうかびそうな場所で小さい子供から大人まで勉強しています。KASUDO芸術専門センターと言って「芸術が私たちの周りに溢れて、生活がもっと素晴しくなっていく」と、このセンターの創始者、林(リン)先生のお言葉です。

彼自身、洗足学園音楽大学を卒業後、台湾に戻り子供達の基礎教育に力を注ぎ、ついにホールまで建ててしまい、そこから育った生徒さんたちがその現場を支えている。そして、日本で行われているクラシック音楽コンクールを台湾全土で行い、全国大会をこのドリームホールで行なっています。

生徒さんたちは真摯に音楽と向き合いひたむきに学び、一度言われたことを必死で練習して次のレッスンに臨んできます。

ここでもスケールの講座で、きれいなハーモニーの話をしてきました。

台湾でも理解される方が増えて台湾支部ができると、また、この純正律音楽研究会も発展するのではと、思いも新たに帰国いたしました。

このお便りを読まれる頃は桜も見頃になっている頃でしょう。
みなさまお元気でお過ごしください。

ムッシュ黒木の純正律講座 第 50 時限目
平均律普及の思想的背景について(39)

純正律音楽研究会理事 黒木朋興

前回はパスカルを援用し、芸術作品を通した<神>とのコミュニケーションについて解説した。今回は、最近私が観た映画の感想を交え、西洋文明における<神>の重要性について続けてみたい。

この度、生まれて初めて『スターウォーズ』を観た。『ローグ・ワン』である。単なるエンターテインメント作品と思いきや、というか、それだからこそ、この映画は西欧民主主義の根幹をなす思想が見受けられた。それは何かと言え、良心に基づく自由意志に関する思想である。あるいは<神>が人間に与えた<理性>と言っても良い。

ネタバレにならない程度に概要を記しておこう。『スターウォーズ』とは皇帝が統べる帝国軍と主人公たちの共和国軍が宇宙を舞台に戦いを繰り広げる物語である。帝国軍は独裁者である皇帝のトップダウンで物事が決まるのに対して、共和国軍は合議制であり重要な作戦の決定は全会一致が原則である。ところが、『ローグ・ワン』の山場は帝国軍の基地への共和国軍の攻撃場面であるが、共和国軍の会議でその基地への攻撃は一旦否決されてしまう。それに対して、主人公と有志の一群は会議の決定に逆らい、攻撃を仕掛けるのだ。明らかな軍規違反である。しかし、このタイミングで作戦を実行しなければ、遅かれ早かれ共和国軍は帝国軍に滅ぼされてしまう、という確信が主人公たちにはあり、それ故に彼らは自分たちの判断で出撃するのだ。もちろん作戦は成功する。

要点は主人公たちが民主的な手続きを踏んだ議会の決定に背いていることである。一見すると民主主義に反する行為だが、実は彼らの行動は西洋近代民主主義の根幹をなす思想に支えられたものであることを指摘しておきたい。その

思想とは、人間は己の良心に基づいて行動しなければならない、というものである。

ここで「良心」という意味のフランス語、conscienceについて解説してみたい。scienceは「科学」の訳語であるが、元々は「知識」という意味であった。そしてconとは「共通の」を意味するので、conscienceは「共通知」という意味になることになる。人類が共通して持たなければならない知とは、良心だというわけだ。この良心に基づいて行動することは、集団の決定や規則・法律に優先される場合がある、というのが近代以降の民主主義を支える重要な考え方の一つなのだ。そして、この良心の背後には「神」から授けられた「理性」があることは言うまでもない。近代とは「神」からこの「理性」を独立させた時代である。西欧民主主義においては、この「良心」を働かせてそれぞれの人間が独自の判断で行動することが求められるのだ。

たとえ命令に背いてでも、議会の決定に反してでも、自らの良心に基づいて行動すべきであるという考えは、プロテスタントによる改革運動や理性を尊ぶ18世紀の啓蒙思想を経て、西欧民主主義を支える原理の一つとなった。その例として、戦争裁判がある。ナチスドイツで輸送部門の責任者だったアイヒマンやフランスの対独協力者だったパポンの話だ。彼らは、法廷で自分たちは上司の命令に従って忠実に仕事をこなしていただけで、何ら法を犯していない。故に、一体何の罪で裁かれるのか？と主張した。事後法であり、裁判は無効であるという主張だ。しかし、結局、多くのユダヤ人を死に追いやった責任を問われて有罪となったとは言うまでもない。彼らに問われたのは「人道に対する罪」なのだ。確かにこの罪は戦中のドイツやフランスでは法制化されていないが、彼らの有罪は揺るがない。このことは、西洋の法体系には、書かれている法の範疇を超えたところにある良心を問う基準があることを示している。法律を犯していなくても良心に抵触すれば裁かれる可能性があるということだ。つまり、法律を守ることに先んじて、個々の人間は良心に基づいて行動しなければならない、ということでもある。それは何より人間とは神によって理性を与えられた存在だからこそ、個人の自由意志で行動することが認められているし、そのような理性的な自由意志を持った存在の集団だからこそ、民主主義が可能なのだという発想に繋がっていく。

それに対してアジアの法の思想では「良心」はそれほど重要視されない。例えば、法家を代表する韓非子の思想をみてみよう。ある時、韓の昭侯は酒に酔ってうたた寝をしてしまったという。そこで冠を管理する役人が気を利かせて衣を王の上にかけた。起きた後、昭侯は誰か衣をかけたかを周りに聞き、冠を管理する役人だと知ると、衣を管理する役人はもちろんのこと、冠を管理する役人も罰した。前者は職務怠慢、後者は越権行為ということである。法は人々に守られることによって、社会に秩序が生じ、社会が安定すればより多くの人民に幸せな生活をもたらすことができる、ということだ。この法家の思想はや

がて儒教に吸収され、アジアの国々の統治者に多大なる影響を及ぼすことになる。

つまり『スターウォーズ』は西洋近代民主主義を支える自由意志を讃える物語であるし、そのモチーフはアジアの法体系ではあり得ない、ということになる。

**連続エッセイ【外科医のうたた寝】第
38話
北極圏でオーロラを観る**

純正律音楽研究会理事

福田六花(シンガー・ランニング・ドクター)

久しぶりに休みをとって外国旅行に行ってきました。僕は3年前に結婚したのですが、すぐに子ども(双子)を授かったので新婚旅行に行けずじまいでした。子ども達がだいぶ大きくなり、義父母に1週間預けられることになったので、遅ればせながら新婚旅行に行くことにしたのです。行き先はフィンランド。北極圏でオーロラを観るのが一番の目的です。

ヘルシンキから国内線を乗り継ぎ、フリーウェイをクルマに揺られて北極圏のレヴィと云う街にやってきました。この街でオーロラが観測出来るのは年間200日ほど。3晩を過ごすあいだに果たしてオーロラに出会えるのでしょうか？

レヴィに着いて最初の夜、21時出発のオーロラ観測バスに乗りました。街灯りのない湖畔に行きオーロラの出現を待つのです。観測スポットの湖畔に着くと、地平線の上いきなり緑色のオーロラがたなびいていました。マイナス15℃の湖畔に3時間佇んで、現れたり、消えたり、揺れたり、カタチを変えたりするオーロラをジッと眺めていました。それは写真で観るような鮮やかな色彩ではなく、もう少しボーッとしたものでしたが、到着早々に遭遇出来た喜びがありました。

2日目の夜はガラス・イグルと呼ばれるガラス張りのドームに宿泊し、ベッドに寝転び北斗七星を見上げながらいつのまにか眠り込んでいました。日付が変わる頃ふと目を覚ますと、ドームの外の針葉樹の森が緑色に燃え上がっていました。2夜続けてオーロラに出会えたのです。

3日目は日中にクロスカントリースキーを愉しみ、夜は早々にホテルのベッドで眠り込んでいたところ、23時頃電話が鳴りました。

「今、凄く大きなオーロラが出てますよ。」

旅行社の駐在員の方がくれた電話に飛び起きて、窓の外を眺めると、スキー場のゲレンデの上にカーテンのようなオーロラがたなびいていました。慌ててダウンジャケットを着てスキー場にあるオーロラ観測スポットに行くと、絵葉書で観たような緑色のカーテンが、夜空を埋めつくしていました。なんだか神様が降りてきているような感覚です。壮大過ぎるショーはわずか5分で終わり、あとは静かな星空がひろがっていました。

CD レビュー 純正茶寮

『Whatever she bring』

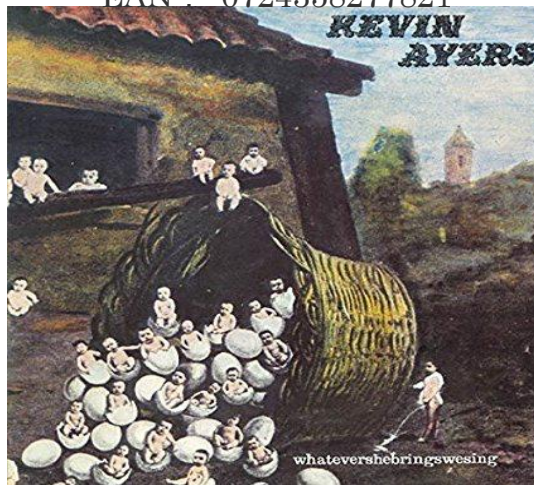
純正律音楽研究会理事 黒木朋興

『Whatever she bring』

Kevin Ayers

ASIN: B00008Y2IW

EAN : 0724358277821



以前に紹介したブルターニュのバンドネオン奏者のフィリップ・オリヴィエがジャケットの写真で参加している。Amazon では販売していないようであるが、購入したいという方は直接このサイトから手に入れることができる：

<http://www.logellou.com/category/label/> かつて紹介したフィリップのCDもこのサイトで購入できるようだ。

ハーディ・ガーディという日本ではまだなじみの薄い楽器のアルバムであるというだけでなく、サウンド・エンジニアがアーティストとして参加しているという面においても特徴的な作品だと言える。

ハーディ・ガーディはもともと身分の低い楽器であった。ヴァイオリンと同じ擦弦楽器だが、ギターやヴィオラ・ダ・ガンバのようにフレットが付いており、さらにそれを鍵盤で操作して演奏をする。弦を擦るのも弓はなく、回転盤をハンドルで回して音を出す。つまり、機械仕掛けの弦楽器と言える。

機械仕掛けと言っても弦の数も少なく、ピアノのような複雑さはないので、当然、調は固定される。というわけで、平均律ではなく、微分音程を使ったスケールやドローンを基調としたキッチリはもった和音も聞くこともできる。

実際ハーディ・ガーディ奏者の方に聞くと、機械仕掛けなだけに微妙な調整が難しいという。それだけに現在の技術で製造されることによって、より安定した演奏が可能となったとも言えるだろう。その楽器が最新の音響技術とコラボが、ヨーロッパの辺境地域の一つであるブルターニュで行なわれている、ということに芸術のたくましさを感じる。

連続6回ドラマ音楽の現場 第三回 撮影所オーケストラの話

玉木宏樹遺作

前にも書いたことだけど貧乏学生だった私はよく劇伴のアルバイトをした。今にして思うと、芸大の学生たるや実に生意気で世間知らずだった。ヴァイオリンの学生だった私は「劇伴をやり過ぎると腕があれる」と先輩にたしなめられたものだし、作曲科の学生も、卒業してから劇伴の作曲をやり過ぎると「筆があれる」などと半ば本気で言っていたものだった。そんな馬鹿な話がまかり通るほど、当時の劇伴環境が劣悪だったことは否めない。

どこの録音スタジオも汚かったが、撮影所のダビングルーム（つまり録音スタジオ）はどの会社にしても共通の、独特の暗さと匂いをもった場所だった。またそこに集まる自称「ガクタイ」とよぶプレーヤーたちは、本当に怖い人たちだった（今考えれば、別にどうってことない人たちだったのは当たり前のことだが）。

大体8人くらいのヴァイオリンの末席を、学生の方の私が占めるのだが、全く場ちがいの雰囲気を感じているのはお互い様で、おとなしくしているつもりの私も、なにかと目だつたらしく、先輩たちからはよくいびられたものだった（これも今から見れば単なるヒガミと被害妄想）。

そんな怖い人たちの中でただ一人、超然とした品のいいおじさんのヴァイオリニストがいた。それなりに場ちがいの雰囲気をもったその人は、もとのN響のコンサートマスターを引退された黒柳さん（黒柳徹子さんの父上）だったりして、驚いたものだった。

ヴァイオリンの集団というのはなぜか暗くなりやすい（理由はあるのだが書くのと長くなるので省く）。ただでさえ暗いスタジオのすみっこで、世をすねたようなサマでいる中年集団というのは不気味ですらあった。

おっちょこちょいのくせに小心者の私なんか、はじめて参加した映画録音現場の、予想もしなかった陰惨さ（ちょっとオーバーかな）にはびっくり仰天して声も出ず、放心状態で弓をこするのが精一杯だった。

なにしろ、この映画はなんですかときいても誰一人答えてくれない。

答えないのも道理で、みんなは別にその映画に興味があつて演奏しに来ているわけでもなんでもなく、一刻も早く帰ることだけを目標にしているのだから、映画の名前をきく人間の方が不思議らしいのだ。

それにまたびっくりしたのが、手書きでよく判読できない新しい楽譜が譜面台に配られても全くそれに目を通そうともせず、なかにはその譜面の上にドサッと週刊誌などをおいて、ワザと憎らしげにシカトしようとする人たちの存在だった。（別に過去形にする必要はない。ガクタイかたぎは今でも健在だ。）

まあ、毎日毎日、あの場末の秘密クラブのようなダビングルームで、とっかえひっかえ、いろんな作曲家に、ああだこうだと言われ続けていけば、仕方な

いことかもしれないが、それにしても、わざと偽悪的にふるまう人が多かったような気はする。

関西にも撮影所オーケストラのあったころの話として、またぎきではあるが、すさまじいまでの「ガクタイ」の鏡のような存在感のつわものがいた。

その人はヴァイオリニストとしてはそこそこの腕前で、宝塚映画のコンサートマスターをやっていた。日頃から下駄をはいてくるようなバンカラな人だったが、ある作曲家の時、その人がスタジオの床に大の字にねころがって、ヴァイオリンを奏こうともしない。作曲家はこまりはて、「どうしたんですか、お願いだから、奏いてくれませんか」と頼んだところ、彼は次のように答えた。

「あんなあ、ワシはソリストと呼ばれてんねん、みんなと一緒に奏けとは言われてへんねん、悪かったなあ」

撮影所に何回か出入りするうちに、団伊玖磨さん担当の音楽という仕事に出会ったことがある。

不思議なもので、こちらは現場へ行くまで作曲家の名を知らされていないから（そんなことをきく奴は、仕事を選ぶ生意気な奴と思われる）、指揮台に座っているのが団さんだとわかったときは、腰が抜けるほど驚いたものだった。

よく考えれば、団さんも当時、映画音楽をたくさんやられていたから、そういう遭遇があっても不思議ではないのだが、それにしても、まるで予期しなかった突然の出会いに、私は、一人孤独にアガってしまったものだった。

作曲科の学生たち相手には生意気にも、「夕鶴」なんてプッチーニのNGさ、団さんなんてたいしたことない、などとほざいていたのに、有名な本人を目の前にして一人アガってしまうなんて、と私は自分のウブな反応に驚いたものだった。

お世辞にもうまいとはいえない撮影所オーケストラの暗い演奏にも、団さんは不満ももらさずにこやかに対応し、プレーヤーも、別段、団さんだからといって、どうってこともなく一日の作業は流れて行く。団さんにしてもプレーヤーを選べるわけではないのだから、おたがいさまではあるわけだ。

このように暗い日本の撮影所オーケストラの実力は、はっきり言ってひどいものだったが、映画の本場、アメリカではどうだったのだろう。比較のためにはここに面白い話がある。

昔、日本フィルハーモニーのコンサートマスターでブロードズアールというアメリカ人がいたことがあった。大変にうまい人で、なんでもこなすし、音楽の造詣にも深く、余技でやるジャズなんかも本格的だった。しかし日本人の間の評判はあまり高くなかった。その理由はと言うと、彼がハリウッドの映画オーケストラのコンサートマスターをやっていたことがあったということなのだ。なんだ、映画オケか、はきだめじゃないか、じゃ、あいつは大したことはない…。事情を知らない日本人が、短絡的にそう誤解したのは仕方ないとしても、実に思慮が浅い。アメリカにとって映画というものは、唯一外国に誇れる芸術産業、だからそこには、自然と国中からのトップクラスのアーチストが集まってくる。オーケストラも当然、超一流プレーヤーの集団である。その中のコンサートマスターは実力者中の実力者、雲の上の存在というわけだ。

欧米の映画音楽は、伝統の深い「付随音楽」の延長線上に存在している。それに比べてわが日本には、映画音楽の伝統なんてものはなにもないに等しく、無声映画時代のチンドンヤまがいの「楽隊」の影を引きずっていたのだ。最近の撮影所には昔のパワーは見る影もなく、音楽録音も普通のスタジオでやるので、昔のような独特の雰囲気は皆無に等しいが、それでもクラシックオケの人たちは今でもその種の録音の仕事のことを「ショクナイ（内職を逆さに読んでいる）」と呼んでいる。

ところで、昔の撮影所のオーケストラは、各社自前の楽団だったから、その団員にとっては、録音仕事は「ショクナイ」ではない。そこへ、オーケストラの「ショクナイ」組がやってくる。腕は相当上だが気分は「ショクナイ」。そこで微妙な気分のすれちがいが生まれる。

私がアルバイトをはじめたころにはもう、撮影所専属のオーケストラというものはなくなっていたが、メンバーの大半は相変わらず昔の専属時代の人たちだったし、まだまだそのころの気分を引きずっていた。

一番面白い体験をしたのは、松竹の大船撮影所だった。映画録音というのは、通常は9時から5時までを定時といい、曲数が少なくて早く終わっても、時間いくらかという最低ギャラは払ってくれる。曲数が多くて、5時を過ぎると、一時間ごとの追加ギャラが払われる。ただし、映画によって曲数は全く違うのだ。シリアスなものほど数は少なく、アクションものやコミックものほど曲数は多くなる。

忙しい売れっ子のプレーヤーにとっては定時に終わるかどうかが大変な問題である。当時はいくら仕事をやってもやり過ぎということはなかったので、5時から以後の別の仕事ができるかどうかは生活問題でもあったわけだ。

大船撮影所の場合、定時が9時半から5時半までだったので、東京のプレーヤーにとっては7時からの仕事が取れるかどうかは重大な問題だった。

曲数が極端に多い場合には延長覚悟できているからいいが、定時ギリギリで終わるかどうかという仕事の場合、たいてい5時過ぎから妙なことが起こる。極端に演奏ミスが多くなって、NG続出となるのだ。朝も早くからやりっぱなしで、丁度くたびれてくるころでもあるのだが、理由の大半はそんな自然なものではない。間違える人のほとんどが大船在住の、旧松竹オーケストラの人たちなのである。かれらにとっては、定時を延長させるのが収入増につながるわけで、一方、東京組は一刻も早く終わらなければならない。

実に微妙でインサンでコッケイなつなひき合戦のすえ、ついに「おねがいです、次の仕事にまにあわなくなります。お願いだから協力してくださいーい！」と懇願するハメにもなる。

こんな陰のせめぎあいのなかで録音していたもののなかに「フーテンの寅さん」シリーズもあった。その音楽は私の師匠の山本直純氏の担当だから、アシスタントをやっていた私はもちろん、その最初の録音の時から立ち会っている。そればかりか私はトラさんの2本目には出演までしている。マドンナのチェリストの所属する弦楽四重奏団のリーダー役である。

思い出多い大船のダビングルームでの録音は今はない。曲と曲との短いあ

いまに慌ただしく繰り広げられた、修羅場のようなポーカー勝負……。
思えば今のスタジオ・プレイヤーはずいぶんと紳士的になったものだ。

(続く)

群馬県と養蚕業

純正律音楽研究会 正会員
弁護士 齋藤昌男

(平成28年9月22日、群馬県安中市の磯部温泉で河童連邦共和国のサミットが開催された折、上州磯部温泉かっぱ村の開村式が行われ、そこで群馬県の紹介を兼ねて、喋ったものに加筆したものです。)

1. 緒論

近代の群馬県は養蚕王国でありまして、現在でも繭の生産量では全国の3割近くを占め、全国で第1位であります。繭から作られた生糸の出荷額では福島に続いて第2位です。群馬の他には、埼玉、長野、福島が養蚕業が盛んであります。養蚕業の歴史は古く、中国から他国に伝わったとされます。日本へは弥生時代に中国大陸から伝わったとされております。

本日は、この養蚕業の話を、多少、申し上げたいのですが、齋藤は養蚕業に携わったことがあるのか、と言う疑問があるかもしれません。後に詳しく述べますが、私は、蚕と、半年間、一緒に生活したことがあるのです。真に思い掛けない体験でした。

2. 世界遺産として登録されている近代養蚕農家の原型と言われる田島弥平旧宅のある島村について

明日は、富岡製糸場の見学のみで、他は見学しませんが、やはり世界遺産として登録されている近代養蚕農家の原型と言われる田島弥平旧宅と言うのが島村（現在は群馬県伊勢崎市）にあります。これから、この島村の話を多少致しますが、幕末から明治にかけての養蚕農家の一典型と思って聞いていただくのが正しいと思います。島村は利根川に貫流される群馬県の東南端の一農村で、島村は現在は伊勢崎市となっておりますが、島村は利根川の東側ではなく西側にあり、古くは利根川が蛇行していたことを示すものであります。私の父は、この島村の出身であり、母は、この島村に沿って利根川の堤防を少し南に下ると中瀬というところがありますが、その出身です。この中瀬も養蚕が盛んでして「中瀬へ嫁にやるな。嫁をもらうなら中瀬からもらえ」と言われたところ。中瀬は、当時は武蔵国の深谷宿、現在は埼玉県深谷市に入ります。当時、蚕種の三大拠点と言われたのが、岩代国の福島、信濃国の上田、武蔵国の深谷でありました。

さて、島村へ話を戻しますと、河川の氾濫地帯は洪水のため耕地に砂が入って穀物の栽培に向かないが、桑の栽培に適して栄養の豊かな桑葉を産出するのみならず、蛆(うじ)害・病害が少ないため蚕種の製造には好適であります。

島村はこうした自然条件に恵まれて享保年間（1716～32）に蚕種製造が始まり、1794年（寛政6）頃、奥州伊達郡保原村から蚕種製造の教師を招いて技術を学び、すでに12、3戸の蚕種商人がいたといわれています。

その後、1822（文政5）年の利根川の大洪水で耕地が壊滅的な被害を受けたりしましたが、1877（明治10）年には戸数の約8割に当たる250戸の蚕種業者がいたそうです。

3. 蚕糸業の発展

安政6（1859）年に、徳川幕府は通商条約を結んだ国々を対象に開港し、貿易が始まりました。開港されたのは、函館、横浜、平戸ですが、そこを通しての貿易の中で、3分の2に当たるのが蚕糸（さんし）類で2番目はお茶でした。蚕糸類とは蚕の種と生糸を指します。蚕糸類が第一位となった理由は2つあります。第1は、当時ヨーロッパでは蚕の病気が蔓延しており、輸入品の蚕糸がほしかったこと、第2は清の国内事情が悪化して、清の輸出が振るわなかったことです。

養蚕業・絹糸は「外貨獲得産業」として重視され、日本の近代化（富国強兵）の礎を築きました。日露戦争における軍艦をはじめとする近代兵器は絹糸の輸出による外貨によって購入されたとも言えます。そして1900年頃には中国を追い抜き世界一の生糸の輸出国となり、1935年前後にピークを迎えた訳です。

4. 養蚕業の大変さ

皆様は何故に養蚕農家の家は大きく出来ているか理由を御存じですか。それは、蚕は、たった25日で1万倍の大きさに成長するので、成長に合わせて広い場所を必要とするからです。

昭和19年、世田谷の経堂国民学校の1年生でしたが、東京に空襲が来ると言うので、夏休み中に信州の松本に疎開しました。松本も危ないと言うので、松本の在の岡田村へ再度疎開をし、行った先が大きな養蚕農家でその離れを借りた訳です。

蚕の卵が産み付けられたものをタネガミ（種紙）と言いますが、およそ30,000粒あります。産れたての蚕は「けご」と呼ばれ、わずか1～3mm程度の大きさしかありませんが、繭を作る頃に1万倍の大きさに成長します。たった25日で1万倍の大きさに成長する生き物は蚕しかありません。従って、短期間の間にどんどん増える訳ですから、毎日、新しい養蚕用の竹かごに移して、どんどん蚕を飼う柵に積んで行きます。みるみるうちに、空であった柵がうまって行きます。私共が借りていた養蚕農家の離れにも沢山の柵があり、蚕が大きくなると、その柵に入って来るのです。夜、キリキリキリと蚕が桑を食べる音を、今でも良く覚えております。その上、

・蚕は一年に3回繭を作ります。

・蚕は、幼虫の間に4回脱皮をします。脱皮が近づくと蚕は桑を食べるのをやめて半日か1日ほどじっとしています。

桑を食べなくなった蚕（かいこ）は、透き通って見え、足元がほんのり赤くなります。それを拾って簇（しゅく）の中に入れてやると、うんことおしつ

こをした後、糸をはき自分の体を固定して繭を作り出します。約1週間で、仕上げさなぎとなります。

蚕が吐き出す一本の糸は、同じ太さの鉄と比べると、はるかに硬く強度があります。

5. 蚕種業とキリスト教受容の社会的背景

蚕種業とキリスト教受容の関係について、かつて早稲田大学の故酒枝義旗教授から話を聞いた事がありますが、どこかに書かれたものがないかと探したところ、ありました。森岡清美著「明治キリスト教会形成の社会史」（東京大学出版会）がそれです。同書205ページ以下には次の記述があります。

1874（明治7）年以來蚕種輸出は不振となり、横浜の間屋に滞在して買手を待つ業者が多かった。77年頃島村勸業会社の出張員として駐在する数十名の業者のなかに、先年宮中紅葉山育蚕所に出仕した Kuさんと Tさん、そして Kaさんがいました。彼らはキリスト教の説教に木戸銭は要らないと聞いて、数週間にわたる滞在中何度か横浜海岸教会へ聴聞に行ったそうです。聖書マタイ伝邦訳と讚美歌小本を買い求めて、アメリカ改革教会宣教師バラ（Ballagh, J.H., 1832-1920）から親しく教えを受けた上に、港内停泊の汽船に案内して見物させてもらいました。Kuさんはバラの丁寧で温厚な人柄に感服し、帰村して横浜の話をするればバラの人徳について語るの、「Kuさんが耶蘇教になった」という噂が高まったそうです。それから数年たって、安中から来たという一青年が集会をもちたいと申入れてきたので、Kuさん方で近所の人々を集めて聖書の講義を聴いたとの事です〔島村郷土誌〕。

この様な形でキリスト教は、広まった様ですが、ちなみに私の親父の家にも、私のお袋の家にも、仏壇とか神棚は、ありません。子供の頃は不思議に思っておりましたが、先祖がキリスト教になっておりました。

6. 鎌倉街道

先程述べた島村では、利根川に舟を浮かべれば、一夜にして蚕種を江戸へ直送することが出来ました。しかし、他の産地では馬の背に載せて何日もかけて横浜へ運びました。

当然のことながら、昔、新田義貞や畠山重忠が、馳せ参じた鎌倉街道を通った訳です。

鎌倉街道は大きく分けて3つのルートがありますが、代表的なルートは下記の通りです。

安中—高崎—藤岡—今市—笛吹峠—入間川—東村山—小平—国分寺—武蔵府中—町田—多摩丘陵—藤沢—鎌倉

この街道は、信州の上田の在の別所温泉を起点にしており、同所は信州の鎌倉と呼ばれております。

以上

（平成29年1月23日脱稿）

玉木宏樹遺作 小説【春の声】
連続四回 第三回

圭ちゃんのフンイキは、だんだんとメフィスト風になっていく。
「ときどき、さわってはいけないといわれていたピアノを、叩いたりしたこともありました。
二つのペダルを同時に踏んで弾くと、ピアノが壊れてしまうという、以前、誰かにふきこまれた他愛もないウソを本気にしていたぼくは、その真偽をたしかめるため、こわごわソオーっと両足でペダルを踏みしめ、まるで寝ている犬を眼がさめない程度になでてやるといった具合にピアノのキーを叩いたんですが、その音が天井に響きわたったとたん、世の中すべてが崩壊してしまいそうな恐怖におそわれ、あわてて表へ飛び出して振り返ってみると、別段、なにごともなく普段のままのままだいるボロピアノを見ては、ホッと胸なでおろしたことなども思いだします。
それからすぐさま、庭中かけまわり、さっきの恐怖など忘れ去って、サビついた鉄棒で宙返りしたり、棒切れで石を打って野球のマネをしたり-----。
なかでもぼくのいちばん好きだったのは、建物の横にまわり、あたりいちめん、野草におおわれた、やや急な崖っぶちに座りこんで下を見おろすことでした。そこはちょうど、国鉄線路の真上で、何十分ものあいだ、飽かずに線路をながめたものでした。ぼくは鉄道大好き少年でもあったのです」

男は圭ちゃんに、さぐるような視線をそそいでいる。
「そこを通り過ぎるいろんな列車の立てる騒音の微妙なちがい-----。信号の、青から突如、赤に変わる瞬間の、機械操作の巧みさ-----。もうすっかり自分が、模型鉄道の司令官になったような気分でした。
<ワム>や<トム>などという、奇妙な名前の貨車の数をかぞえていると、逆方向からきた電車が、その視界をさえぎります。当時は、日曜出勤の人も多く、すぐ足もとを通り過ぎる通勤電車は、あたりのほの暗さのなかで、もはやあかあかと車内灯をつけ、新聞を読んだり雑談したりしながら家路につくサラリーマンたちは、まるで劇中の人形のようにも見えたりしたものでした。
ぼくは子供ながらも、通勤電車、長距離列車、貨物列車などの過ぎ去っていく後尾灯の赤い光のなかにいちまつの哀れさを感じたりしたものです」
男は、無言のままふところから布を取りだし、サングラスの掃除をはじめた。女も、カウンターの奥でかたづけをはじめた。
「すみません。話がへたくそで、なかなか<春の声>に到着しませんね。もうちょっとおつきあい下さい。
さてぼくは、毎週一回、苦しくて長い練習に通っていたんですけど、なにもつらいことばかりではありませんでした。あの隷属的な反復練習が終わりをつげたときの解放感、それは、何ものにも変えがたい幸せな瞬間でした。
だって、あの練習風景ときたら、それはもうひどいもんで。ちょっと先へ進ん

では立ちどまり、また二三小節先でつかえ、そんなことを何度もくり返して、もたもたしながら、やっとある段落までたどりつきます。ああ、やっと半分までできたか、さあもう少しと思ってホッとした瞬間の、あの冷酷な先生の無残な宣言くさあ、いま言ったことを忘れないようにして、もう一度最初からやりましょう。さっき注意したところが駄目だったら、もういちど止めますよ> またもや振り出しに戻り、百遍も二百遍も奏いて、とっくの昔に飽き飽きウンザリの楽譜、結果はまたも同じところでつかえ、いつもの叱言。そしてまた、いつ果てるとも知れない反復練習地獄。そのたびにあの古びた大時計のローマ数字をにらみながら、がっかりしたり嬉しくなったり-----。

やっとのことで練習が終わりを告げたときのあの解放感と充足感。もう心は家路へ一目散、自然と声も高ぶり、大声で先生たちに別れを告げたものでした」

「-----」

「当時のオーケストラのメンバー中、子供はぼくひとり。ほとんどがサラリーマンや学生たちの集まりで、なかにはもう、反射神経もサビついて、いつもリズムを乱すお荷物のようなおじいさんもいました。

その中であって、神戸から通っていたのが、ぼくと、それにこれから話そうと思っている二人の年上の女性、計三人でした。

その二人とぼくは、ともに同じ先生についている同門の生徒というわけで、二人ともそのとき、高校一年のお姉さんでした。

練習後の、あのスガスガしい解放感。それはもうすばらしいの一言ですが、それにしても、そのあと四十分もかけて独りぼっちでさびしく帰るんであれば、ぼくはとっくの昔にあんなオーケストラなど、やめていたでしょう。あの練習後の幸福、それはつまり、あの二人のお姉さんたちと一緒に帰れるということろにあったんです」

男は一瞬、何ごとかをつぶやくように唇をひくつかせたが、すぐに黙りこみ、いぶかしげに圭ちゃんを見つめた。

「二人のうち、Nさんとは三宮駅で別れますが、あとの一人とは、それからのバスも一緒でした。ぼくの方が先に降りるんですが、その人とは本当に、ウチの近くまで一緒に帰ったもんです。その人はTさんといい、ぼくのところからバスで四つ目くらいの」

男は突然、圭ちゃんの話さをえぎった。

「なんだって！ おい、NさんとTさんだって！」

男の視線は、鋭い疑惑を帯びて険しくなっていていき、それまでの姿勢を変えた。しかし圭ちゃんは自分の話に夢中なのか、男の態度の変化には、あまり注意を払わないようだった。

「Nさんのお父さんもTさんのお父さんも、当時のクラシック気違いの一員だったようで、とくにNさんのお父さんはヴァイオリン好きが昂じて、御自分でヴァイオリン作りをはじめたというくらいのマニアぶりでした」

男は圭ちゃんから眼をはなさずビールを一気に飲みほした。深夜にもかかわらず、飲むピッチは早まるようだった。

「中学生では、恋愛などと呼べるような感情はまだないけど、その芽生えみたいなのを、ぼくは感じていたようです。

二人とも、さして美人とはいえなかったけど、他の子供たちとは違った世界にいるという特殊な連帯感の中では、二人にたいして特別な感情を抱いてもごく自然なことだし、同様に、向こうの方でもそう感じていることは、ぼくにもわかっていました」

「-----」

「同級生の女の子はだいの苦手で、いっさい話しかけられないように避けていましたが、あの二人はまるで別でした。

それにしても二人の性格はまるで正反対。Nさんの方は大柄で、少しおっちょこちょいでもありましたが、いつも暖色系の服を着てよくしゃべる朗らかな陽性。それにたいしてTさんの方は、いつも黒っぽい服を着る、口数の少ない、もの静かな人でした。ぼくは、Tさんの方がうちが近いということと、無口ながらもはにかむ笑顔のきれいな彼女がとても神秘的に思え、最初、ぼくはTさんの方をとっても好きだったんです」

圭ちゃんは男から眼をそらし、中空を見ながら話しつつけた。

「それに気づいたNさんは、悪気があったとは思えないけど、ときどきNさんをいじめるようになったんです。そしてときには、そそのかされたぼくも一緒になって、Tさんをいじめ始めたりして-----。

あとから気づいたことなんですが、いじめの原因は別のことにもあったようです。

三人の中ではぼくが一番遅くヴァイオリンを始めたうえに、上達が早かったので、別扱いされていたようですが、NさんとTさんはヴァイオリンを習い始めたときもほぼ同じで同学年、しかも同じ神戸です。あまり仲がよくなれないのも当然でしょう。そして練習曲の上達もほぼ同じくらいだったようですが、Tさんの方が一步はやく<チゴイネルワイゼン>に到達したのです。そのころの子供にとってばかりでなく、実はヴァイオリンを習わせている大人にとってこそ、<チゴイネルワイゼン>を奏くということはヴァイオリンの頂点に立ったんだというくらい重みのあることだったのです。その輝かしい頂点に、Tさんの方が先に到達してしまったのです。Nさんのいじめの原因は、無意識のうちに、そんなところにもあったんだろうと思われれます。

ただ、いちはやく<チゴイネルワイゼン>に到達したとはいえ、Tさんのヴァイオリンの腕はまったく平凡で、だいたいぼくたちと似たりよったりでしたが、ただひとつ、致命的な欠点がありました。それは、どうしようもない音程の悪さでした。といっても、ヴァイオリンを習っている人間にしかわからない程度のことなんですが、その微妙な音程の狂いが、その人の死命を制するくらい、ヴァイオリニストにとっては根源的な問題なのです。ああ、こんなよけいなことをいってごめんなさい。先生もヴァイオリン出身でしたね」

「-----」

「Nさんは、ほぼその点を集中的に、Tさん攻撃の材料にしました。ぼくも最初のうちは、別に悪気もなく、軽い気分でからかったりした程度だったんですが-----。

そんな我々に、Tさんは不思議なことにいっさい反抗せず、ただ悲しそうに打ち沈むだけでした。それがますますぼくたちをつけあがらせ、いやがらせは次々

とエスカレーターしていき、それにつれてぼくの心は段々とTさんから離れ、Nさんの方に心移りしていきました。

Tさんとのあいだには、こんなこともありました。

-----このあいだ、学校の美術の時間にね、先生が、君たちは何色が好きだってきいたんだ。ぼくは緑色が大好きなんだけど、そういう人は、いま幸福で恵まれてるんだって。赤は、やんちゃでいたずら好き。黄色は、ちょっとキ印なんだって。Tさんは、何色が好き？

Tさんの答えは意外なものでした。吐き出すようにポツリとひとこと<黒>と。ぼくの方は独り合点で、きっとTさんも<緑>と答えるものと決めてかかっている、二人で喜び合えるものと思いこんでいましたから、あまりにも意外なTさんの答えにぼくは当惑し、しばらく返す言葉もありませんでした。

それは三宮から乗ったバスの中での会話でした。トーアロードを延々とのぼりつめた北野町一帯の異人館は、いまでもこそ神戸の顔のようになっていますが、当時はさびれきって夜は暗く、すこし手前に建っている回教寺院の、闇夜にボーッとネギ坊主のような頭をアラワにしている気味悪さとともに、Tさんの心の底知れぬ暗さを一瞬かいま見たような気分におそわれ、会話は途切れてしまったのをおぼえています。

ぼくの心がTさんから遠のいたのは、このことも原因にもなりました。

しばらくしてから、黒の好きな人はなに？ と訊かれたぼくは、ウソをつくわけにもいかずモゴモゴしながら、ほんとうかどうか知らないけど、黒の好きな人は、陰気でありあまり良くないんだって、と遠慮勝ちに答えても、彼女は少しさびしうに力なくほほえんだだけでした。

-----そう、私ちょっと暗いところがあるって、みんなに言われるわ-----

そんなことがあったところに、例の<春の声>の練習が、あのオーケストラで始まったんです。

いまでもこそ、優雅でノスタルジックな良さはよくわかるし、大好きな曲ですが、子供だったぼくにとって、あの曲の出だしなんかは特に、ウネウネと意地悪くのたうつ、地獄の蛇使いのような気味悪い感じで、どこがいいのかさっぱりわからず、たいへんにいやな曲でした。だって、出だしからあんなに臨時記号の多い、音程の取りにくい曲は見たこともなかったし、音程だけならまだしも、リズムまでややこしくて-----。でもそのうち、得意のごまかしで、奏けるフリをすることくらいはできるようになりました。よくさらうNさんの方が、上達は早かったようですが、そんなぼくたちにくらべてTさんは、いつまでたっても音程がとれず、一向に上達しません。だからアンサンブルを乱し、そのたびに先生は曲をとめる。そしてあのとめどない反復練習の地獄-----。

いつまでたっても先に行かないのは、みんなTさんのセイだと、怒りを貯めこんだぼくは、ついにある日、みんなの前で大声で叫んでしまいました。

-----オンチ！ あんたみたいなオンチとは一緒にやっつけられないよ。オンチに

ヴァイオリンなんか奏けるもんか！-----

なんという残酷なことを言ってしまったことでしょう-----。子供の＜純真さ＞なんて大ウソ。甘やかしのなかでエゴだけがむき出しになった、実に卑劣な死刑宣告でした。

(続く)

今後のスケジュール

【癒しの純正律音楽コンサート】

2017年9月16日土曜日 16時開演

会場：山崎製パン 飯島藤十郎社主記念 LLC ホール

出演：水野佐知香(Vn.)、三宅美子(Hp.)、吉原佐知子(箏)

入場料：前売り 3,000円 (当日券 3,500円) 学生 2,000円



おたより募集！

会報のご感想、ご意見、純正律音楽にまつわること等々、なんでもお寄せ下さい。たくさんのお便りを、お待ちしております。

次号の【ひびきジャーナル】にてご紹介させて頂きたいと思っております。

〒168-0072

東京都杉並区高井戸東 3-2-5-102 NPO 法人 純正律音楽研究会

お電話：03-5317-0291 FAX：03-5317-0289

e-mail：puremusic0804@yahoo.co.jp

<http://just-int.com/>

平成 29 年 3 月 24 日 発行責任者：NPO 法人 純正律音楽研究会

編集：相坂政夫